



第75回 かけがえのないもの

▼他に代えがたいもの

最近、「かけがえがない」という言葉が気になっている。私も今年還暦となり、母も80代半ばで鳥取の実家で暮らしているが、いつまでこの状態が維持できるかわからない。先日、母が入院し、がらんとした実家に一人で佇んでいると、その寂しさ、わびしさが身にこたえる。たくさん家族がいて賑やかだった小さい頃がしきりと思い出される。まさか、この家に暮らす人が一人もいなくなるとは。手入れされない庭は、あっという間に雑草に覆われる。ときおり思い出したように草を刈ってみるのだが、祖父が丁寧に手入れしていた往年の美しい庭には、決して戻らない。

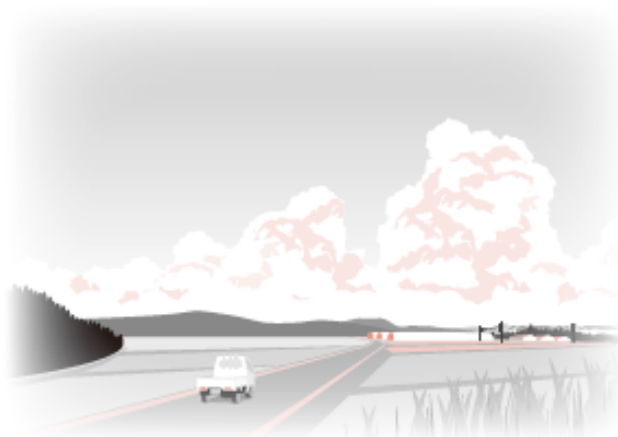
▼美田と庭

手入れの行き届いた田んぼや庭は、とてもうつくしいものだ。あぜの雑草を放置すれば、害虫がついて稲に悪影響するので、あぜ地の草刈りは欠かせない。自分でやってみるとわかるが、いったん草刈りはじめると、「きれいに刈っておきたい」という気持ちが次第に強くなる。これは、「庭を手入れする」気持ちと似ているように思う。祖父も「他人に見せるため」に、庭の手入れをしていたわけではなかったはずだ。やむにやまれぬ気持ちの積み重ねが、田んぼを「美田」に、庭を「美しい庭」にするのであろう。いっぽうで、「見孫のために美田を買わず」という故事もある。美田や立派な土地屋敷を手に入れても、それは決して子孫のためにはならないという戒めである。あくまで自分一代限りと思えば、さだめてやるべきである。

▼かけがえのない記憶

自分にとってかけがえのないものとは何か。それは、家族、仕事、生きがい、いろいろ思い浮かぶが、

記憶もそのひとつだ。小さい頃、実家で過ごした蒸し暑い夏の記憶、秋の夕暮れ、冬の夜の大雪、そういう記憶の背景には、つねに家を含む土地の風景がある。しかし、その頃いっしょに過ごしていた家族は、今はもういない。いま目の前にあるのは、住む人のいない、少しくたびれた古めかしい家屋だけだ。「かけがえがないのは記憶であって、その家屋や土地ではない」とわかっている、記憶は過去に飛び、ひとりで語りはじめる。私にとってかけがえがない風景と同じように、私の子どもたちも、まったく別のかけがえのない風景があるのだろう。「かけがえのない」というのは、きわめて個人的なもので伝達不可能なものに思えてくる。同じ家で暮らし、何世代もが同じ釜の飯をたべ時間を過ごした「家」がなくなった現代、世代を隔てた家族が「同一のかけがえのない記憶」をもつことは、難しくなっているのかもしれない。それはそれで、自由なようでもあり、少し寂しくもあるのだ。



鳥取大学医学部
地域医療学講座
教授

谷口 晋一
(たにぐち しんいち)